

令和6年度全国学力・学習状況調査の結果（概要）のポイント

文部科学省・国立教育政策研究所



1 令和6年度全国学力・学習状況調査の概要

調査の目的

義務教育の機会均等とその水準の維持向上の観点から、

全国的な児童生徒の学力や学習状況を把握・分析し、教育施策の成果と課題を検証し、その改善を図る

学校における児童生徒への学習指導の充実や学習状況の改善等に役立てる



そのような取組を通じて、教育に関する継続的な検証改善サイクルを確立する



調査概要

調査実施日	令和6年4月18日（木）
調査対象	①児童生徒：小学校6年生、中学校3年生 ②学 校：小学校等（約19,000校）、中学校等（約10,000校）
調査事項	①児童生徒：教科調査〔国語、算数・数学〕 / 質問調査 ②学 校：質問調査
調査問題	・学習指導要領で育成を目指す、知識及び技能や思考力、判断力、表現力等を問う問題を出題。 ・各大問において「主体的・対話的で深い学び」の視点からの授業改善のメッセージを発信。
今年度の調査の特徴	・児童生徒質問調査について、全面的にオンラインによる回答方式で実施。

教科に関する調査結果概要

全国（国公私）の平均正答数・平均正答率

小学校		中学校	
国語	算数	国語	数学
9.5/14 問 (67.8%)	10.2/16 問 (63.6%)	8.8/15 問 (58.4%)	8.5/16 問 (53.0%)

➤ 教科に関する調査結果のポイントは P.2・3

2 教科に関する調査結果（国語）



- 事実と感想、意見との区別が明確でないなど、自分の考えを伝えるための書き表し方の工夫に課題が見られた。
- 自分の考えなどを記述していても、必要な情報を取り出すことや表現の効果を考えることに課題が見られた。

→小・中学校を通じた効果的な資質・能力の育成のため、記録、要約、説明、論述、話し合い等の言語活動を工夫することが重要。

小学校国語 大問2二

目的や意図に応じて、事実と感想、意見とを区別して書くなど、自分の考えが伝わるように書き表し方を工夫することができるかどうかをみる問題

みんな仲良し「たてわりはん」

わたしたちの学校には、1年生から6年生までのメンバーが、同じはんで活動する「たてわりはん」の取り組みがあります。「運動会」や「たてわり遊び」を通して、ちがう学年の人とも仲良くなります。

「運動会」は、「たてわりはん」ごとに赤、青、黄の色を決め、3色対こうで行います。上級生が下級生に応えんの仕方を教えたり、下級生も楽しめるように、アキょうぎの作戦を考えたりします。「みんなでつな引きをして楽しい」という2年生や、「下級生といっしょに応えんして熱い気持ちになる」という5年生がいます。このように、「運動会」のよいところは、みんなの心が一つになるところだと思います。

「たてわり遊び」は、毎月1回、休み時間に「たてわりはん」で遊ぶ活動です。みんなが楽しめるように、6年生が、遊びたいことを下級生に聞いたり、ルールをくふうしたりします。例えば、ドッジボールでは、上級生が遠くからボールをい_いなげるようにしています。

「たてわり遊び」に関する文章の空欄に、次の条件に合わせた内容を書く。

条件①「たてわり遊び」のよさについて考えたことを書くこと。

条件②下級生に聞いたことから言葉や文を取り上げて書くこと。

下級生に聞いたこと

- 1年生 お兄さんやお姉さんと遊べて楽しかった
- 3年生 好きな遊びや新しい友達が増えた
- 4年生 みんなが楽しそうであうれしかった

正答例 (正答率 56.7%)	「お兄さんやお姉さんと遊べて楽しかった」という1年生や、「みんなが楽しそうであうれしかった」という4年生がいます。このように、「たてわり遊び」のよいところは、学年をこえた交流ができるころだと思います。
誤答例	たてわり遊びをしている下級生の1年生は「お兄さんやお姉さんと遊べて楽しかった」や、3年生は「好きな遊びや新しい友達が増えた」と答えてくれました。このように、みんなたてわり遊びを楽しんでいました。

事実と感想、意見とを明確に区別せずに、事実を自分の考えのように書いて、条件①を満たせなかった児童がいた（___線部分）。

中学校国語 大問1四

話し合いの話題や展開を捉えながら、他者の発言と結び付けて自分の考えをまとめることができるかどうかをみる問題

自分の好み情報「だけ」に囲まれ、多様な意見から隔離されやすくなる現象。

（文部科学省ウェブページによる。一部改変。）

「フィルターバブル現象」に関する生徒たちの話し合いを受け、自分ならどのような考えを述べるかを記述する。

条件① フィルターバブル現象の特徴について取り上げながら、これからどのように本を選びたいかを具体的に書くこと。

条件② 話し合いの誰の発言と結び付けるのかが分かるように書くこと。

山岡さん：皆さんは、【フィルターバブル現象の資料】にあるような経験がありますか。

今井さん：私の兄は、時々、インターネットで検索して本を買っているのですが、趣味にしている将棋に関する本の表示が多くなったと言っていました。これは、フィルターバブル現象が起きているということでしょうか。

（以下省略）

正答例 (正答率 45.1%)	今井さんが言うように、 <u>フィルターバブルには好みに合った本を選んで示してくれるという便利な面もあるし、藤田さんが言うように、それ以外の本に出会いにくくなることもあるので、本を選ぶときには、インターネットと図書館などを使い分けたいと思います。</u>
誤答例	山岡さんが話してくれた、様々な人がおすすめの本を紹介しているウェブページを利用して本を選んでみたいと思いました。

話し合いの目的も踏まえ、発言においてフィルターバブル現象の特徴について取り上げるべきだが、取り上げることができず、条件①を満たせなかった生徒がいた（___線部分）。

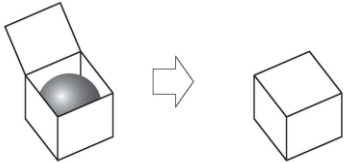
2 教科に関する調査結果（算数・数学）



- 図形や単位量当たりの大きさ（速さなど）について、深い理解を伴う知識の習得やその活用に課題が見られた。
 - 複数の集団のデータの分布の傾向を比較して捉え、判断の理由を数学的な表現を用いて説明することに課題が見られた。
- 日常生活を絡めながら、活用できる知識・技能を習得させることが重要。また、データの活用については、小学校段階からデータを言葉と数を使って表現する力を身に付けさせることが重要。

小学校算数 大問3(3)

球の直径の長さや立方体の一辺の長さの関係性を捉え、立方体の体積の求め方を式に表すことができるかどうかをみる問題



直径22cmの球の形をしたボールがぴったり入る立方体の体積を求める式を書く。

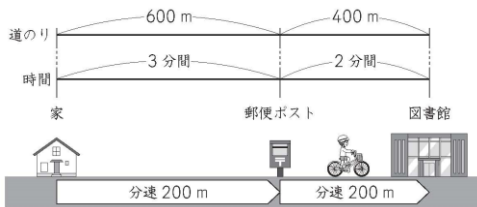


深い理解を伴う知識の習得ができておらず、体積の単位とこれまでに学習した単位との関係を考察できていない児童がいた。

正答	$22 \times 22 \times 22$
正答率	36.9%
誤答例	① 22×22 ② 22×3.14 など 3.14を用いた式 ③ 22×6 等

小学校算数 大問4(4)

速さの意味について理解しているかどうかをみる問題



家から郵便ポストまで分速200m、郵便ポストから図書館まで分速200mのとき、家から図書館までは分速何mかを求める。



速さなどの単位量当たりの大きさの意味や表し方についての理解に課題がある児童がいた。

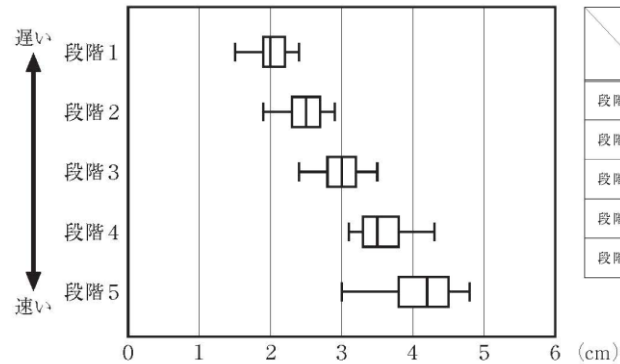
正答	分速200m
正答率	54.4%
誤答例	① 分速400m (24.3%) ② 分速1000m (3.1%)

中学校数学 大問7(2)

複数の集団のデータの分布の傾向を比較して読み取り、判断の理由を数学的な表現を用いて説明することができるかどうかをみる問題

車型ロボットの進んだ距離について、「速さが段階1から段階5まで、だんだん速くなるにつれて、進んだ距離が長くなる傾向にある」と主張することができる理由を、進んだ距離の分布の5つの箱ひげ図を比較して説明する。

【進んだ距離の分布】



	10 cm の位置から進んだ距離 (cm)				
	最小値	第1四分位数	中央値	第3四分位数	最大値
段階1	1.5	1.9	2.0	2.2	2.4
段階2	1.9	2.3	2.5	2.7	2.9
段階3	2.4	2.8	3.0	3.2	3.5
段階4	3.1	3.3	3.5	3.8	4.3
段階5	3.0	3.8	4.2	4.5	4.8

正答例	速さが段階1から段階5まで、だんだん速くなるにつれて、箱ひげ図の箱の位置が右側にずれていっている。
正答率	26.4%
誤答例	<ul style="list-style-type: none"> ・ 段階1と段階5を比べると約2倍の差がある。 ・ 段階が遅いと箱ひげ図は3cmよりも後ろにあるが、段階が遅いと前にかたまっている。



複数の箱ひげ図を比較して、データの分布の傾向について判断した理由を説明することに課題がある生徒がいた。

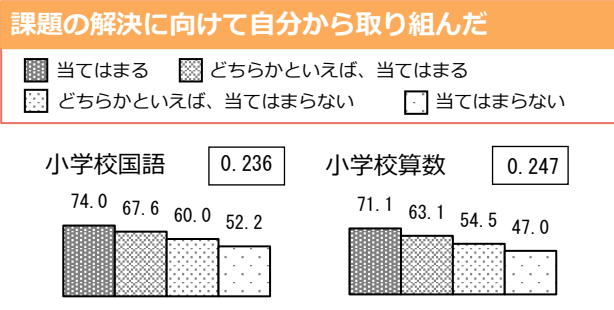


※ □内の数字は相関係数

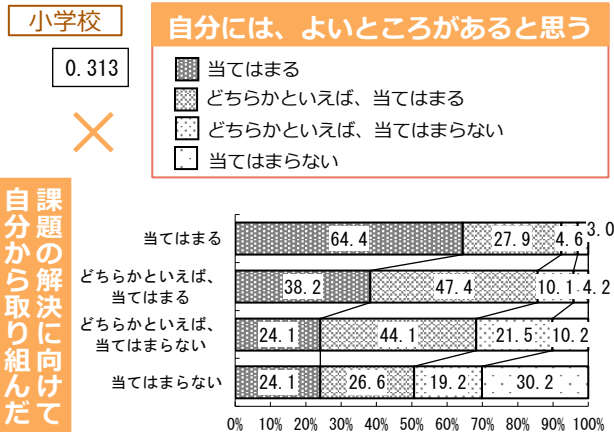
学習指導要領の趣旨を踏まえた取組

- ◆ 「主体的・対話的で深い学び」に取り組んだと考える児童生徒ほど、各教科の正答率や挑戦心・自己有用感・幸福感等が高く、自分で学び方を考え工夫している。

児童生徒質問「課題の解決に向けて自分から取り組んだ」の選択肢ごとの教科の正答率

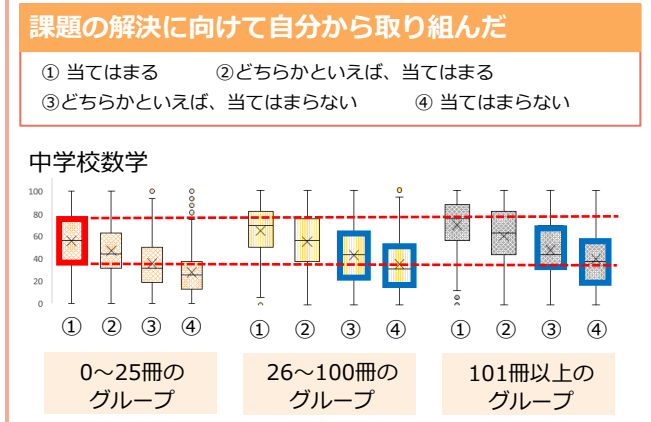


児童生徒質問「課題の解決に向けて自分から取り組んだ」と児童生徒質問「自分にはよいところがあると思う」のクロス集計



- ◆ 低いSES（社会経済的背景）でも「主体的・対話的で深い学び」に取り組んだ児童生徒は、高いSESで取り組めていない者よりも各教科の正答率が高い。

SES（社会経済的背景）別に見た「課題の解決に向けて自分から取り組んだ」の選択肢ごとの教科の正答率

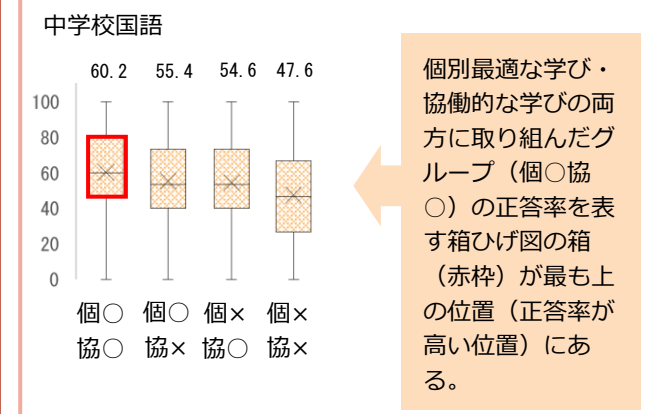
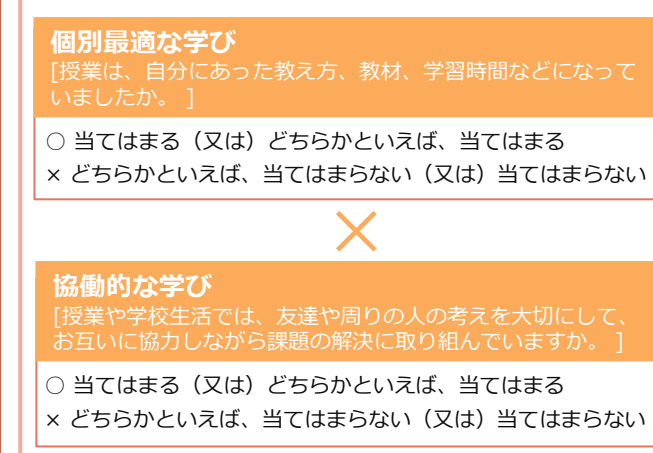


例えば、中学校数学では、低SESグループ（本が0~25冊）で主体的・対話的で深い学びの質問に「①」と回答した生徒の箱ひげ図の箱は、中SESグループ（本が26~100冊）で「③」「④」と回答した生徒及び高SESグループ（本が101冊以上）で「③」「④」と回答した生徒の箱より上の位置（正答率が高い位置）にある。

(注) 中・高SESグループの箱ひげ図のうち、低SESグループで「①」と回答した児童生徒の箱ひげ図の箱（赤枠）の第1四分位又は第3四分位を下回っているものの箱に青枠を付している。

- ◆ 「個別最適な学び」と「協働的な学び」の両方に取り組んだ児童生徒グループは、他のグループに比べて、各教科の正答率や授業の理解度、挑戦心・自己有用感・幸福感等が高い。

児童生徒質問「個別最適な学び」「協働的な学び」の回答状況と教科の正答率



3 質問調査結果（児童生徒、学校）②

※ □内の数字は相関係数

ICT機器の活用

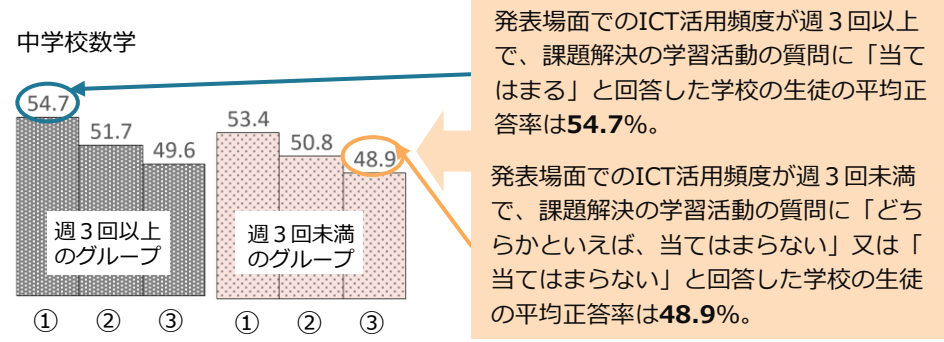
◆ ICT機器を「ほぼ毎日」「週3回以上」活用する学校は、**小学校93%**（前年比3ポイント増）、**中学校91%**（前年比4ポイント増）。

◆ 課題解決に取り組む学習活動を行っている学校ほど、**考えをまとめ、発表・表現する場面**でICTを活用している。その両方に取り組んだ**学校グループ**の児童生徒は、それ以外のグループよりも**各教科の正答率**が高い。

発表場面でのICT活用頻度別に見た学校質問【課題解決に向けて話し合い、まとめ、表現する学習活動】の選択肢ごとの教科の正答率

課題解決に向けて話し合い、まとめ、表現する学習活動

- ① 当てはまる ② どちらかといえば、当てはまる
- ③ どちらかといえば、当てはまらない（又は）当てはまらない



発表場面でのICT活用頻度が週3回以上で、課題解決の学習活動の質問に「当てはまる」と回答した学校の生徒の平均正答率は**54.7%**。

発表場面でのICT活用頻度が週3回未満で、課題解決の学習活動の質問に「どちらかといえば、当てはまらない」又は「当てはまらない」と回答した学校の生徒の平均正答率は**48.9%**。

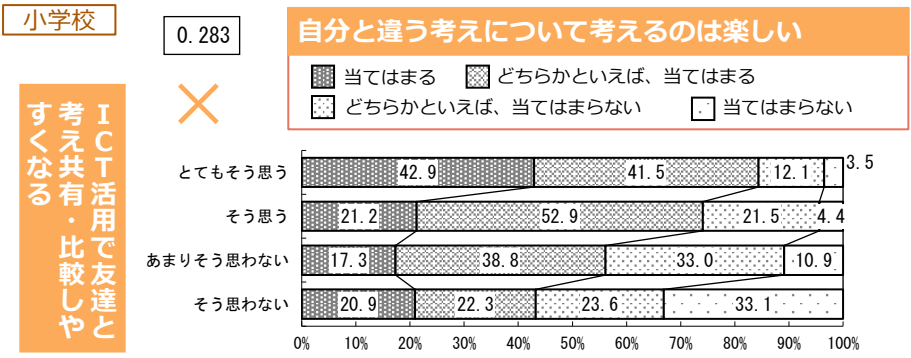
◆ 該当者のいる学校の7割以上で、授業配信を含め、ICT機器を活用した**不登校児童生徒の学習活動等の支援**が行われている。

◆ 約**9割**の児童生徒が、以下のような**ICT機器活用の効力感**を感じている。

- 分らないことがあった時に、すぐ調べることができる
- 画像や動画、音声等を活用することで、学習内容がよく分かる
- 友達と考えを共有したり比べたりしやすくなる

◆ **ICT機器活用の効力感**が高い児童生徒ほど、**挑戦心・自己有用感・幸福感**等が高い。

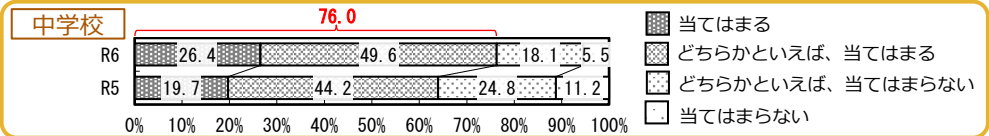
児童生徒質問【ICT活用で友達と考え共有・比較しやすくなる】と児童生徒質問【自分と違う考えについて考えるのは楽しい】のクロス集計



ICT活用で友達と
考え共有・比較しやすくなる

挑戦心・自己有用感・幸福感等

◆ 「地域や社会をよくするために何かしてみたいか」の質問に肯定的に回答した児童生徒は、小学校で**84%**（前年比7ポイント増）、中学校で**76%**（前年比12ポイント増）。



学校外での過ごし方

◆ 学校の授業時間以外の勉強時間は、小・中学生とも**令和3年度以降、平日、休日いずれも減少傾向**。

◆ **テレビゲーム***をする時間は小・中学生とも**横ばい**、**SNS・動画視聴**の時間は、小学生は横ばい、**中学生は微増**の傾向。
*コンピュータゲーム、携帯式のゲーム、携帯電話やスマートフォンを使ったゲームも含む。

4 文部科学省の主な取組一覧

1 調査結果を活用した追加分析等

○ 令和6年度までの調査の結果を活用した追加分析

- 全国学力・学習状況調査の目的の達成に資するため、大学等の研究機関等の専門的な知見を活用した高度な分析に関する調査研究を委託にて実施。

○ 個票データの貸与

- 大学等の研究者による多様な学術研究の分析等を促進するため、個票データ等の貸与を実施。

2 学習指導要領の着実な実施

○ 主体的・対話的で深い学びの視点からの授業改善

- 学習指導要領の趣旨・内容の周知・徹底（各都道府県等の指導主事を対象とした協議会の開催）。
- 「個別最適な学び」と「協働的な学び」の一体的な充実に向けた取組を進めている学校の好事例を周知。
- 学力向上やカリキュラム・マネジメントに関する成果のとりまとめ・周知。
- 初等中等教育段階からの理数系教育に興味・関心をもつ人材の育成を推進するため、令和6年度より「理数好きな児童・生徒を育てる探究学習推進プラン」を実施。

○ 指導改善に資する情報提供等（国立教育政策研究所）

- 報告書（授業アイデア例を含む）を作成し、国立教育政策研究所のWebサイトに掲載（教育委員会や学校等で学習指導の改善・充実を図る際に活用）。
- 全国説明会（各教育委員会、教員養成大学等対象）を開催し、学習指導の改善・充実のポイントを解説（令和6年8月20日（火）オンライン開催）。
- オンラインなども活用しながら、学力調査官等による教育委員会や学校への指導・助言を実施。
- 令和5年度の全国学力・学習状況調査の結果を踏まえて、中学校英語の指導事例集を作成し、Webサイトに掲載（令和7年3月頃を予定）。

3 児童生徒の豊かな心をはぐくむ取組の推進

- 道徳教育や特別活動、体験活動、生徒指導など学校教育活動全体を通じて児童生徒の豊かな心をはぐくむ取組を推進。
- 保護者等を対象とした子供のインターネット等の適切な利用について理解を深める取組を推進。

4 GIGAスクール構想の更なる取組の推進

○ 自治体・学校への伴走支援の取組

- GIGA StuDX推進チームによる研修の実施、自治体の課題に応じた支援の提案。
- リーディングDXスクール事業において、効果的な実践例を創出・モデル化し、その横展開の推進。
- 国費による学校DX戦略アドバイザーの派遣等による支援。
- 学校種別の授業動画など、切れ目のない研修コンテンツの提供。

○ 学校のICT環境整備の推進

- 更なる活用に向け、端末の着実な更新や学校のネットワークの改善を推進。

○ 校務DXの推進

- 令和6年から3年程度を集中取組期間と位置付け、校務DXにより教職員の働き方改革や教育活動の高度化等を推進。

○ 学校のICT環境を活用した取組

- 1人1台端末を活用した児童生徒の悩みや不安の早期発見・支援を推進するとともに、ICTを活用した学習も含め、不登校児童生徒が行った学習の成果を成績に反映することができることを法令上明確化するための法令改正を実施予定。
- 特別な支援を要する児童生徒に対するICT機器を活用した指導方法を、教員が模擬授業などの演習を通じて体験的に学ぶ機会の提供。
- 外国人児童生徒等に対するICTを活用した日本語指導等を実施する自治体を補助事業により支援。

5 教師を取り巻く環境整備

- 学校における働き方改革の更なる加速化、教師の処遇改善、学校の指導・運営体制の充実、教師の育成支援の一体的推進。
- 小学校における35人学級の計画的整備や高学年教科担任制の強化等のための教職員定数の改善、教員業務支援員の全小・中学校への配置等の支援スタッフの充実に係る支援。
- 管理職のマネジメント力強化を含む研修の充実。
- コミュニティ・スクールと地域学校協働活動の一体的な取組の推進。